

*A*lternative *S*ystems *S*tudy *B*ulletin

第7巻第4号
(1999年10月15日発行)

目 次

発刊にあたって

平田清明の物象化論の検討

商品の原理—価値形態論の解説—

マルクスの貨幣論(1) 価値の尺度

編集人 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱169号
貿易研究会

会 費 正会員 : 年間1口 10万円
賛助会員 : 年間1口 3万円
購読会員 : 年間1口 1万円

会費振込先(郵便振替) (口座名) 資本論研究会
(口座番号) 01090-5-67283

発刊にあたって

協同組合宣言起草委員会では、グリーンコープ武田前会長の遺稿集につづき、生活クラブの理論の研究を始めています。そこで生活クラブのキーワードの一つとなっている市民社会について、60年代後半に精力的な理論活動を行った平田清明の『市民社会と社会主義』を素材に検討してきました。そして平田の市民社会論が独自の物象化論とセットになっていますので、まず物象化論について調べてみました。

30年前の業績としては先駆的であったと思われませんが、今日からのみれば、商品の価値形態についての理解に弱いものがあることが判明しました。そして、このことと市民社会を資本家社会と対比して前者を美化していく平田の市民社会論とが結びついていることがわかりました。

あと、平田の業績が提出された頃から、日本での市民社会（シビルソサイエティという意味での）が成熟しはじめてきます。ところが平田の市民社会論は、この現実につき動かされつつも、現存社会主義が市民的自由を圧殺した、という事態に対し、平田は社会主義社会の下での市民社会の復活を主張したのでした。

平田の市民社会論は、既成社会主義への批判という意味ではインパクトがありましたが、しかしそれは日本で現実に成熟しはじめた市民社会を分析の対象としてはいませんから、市民社会が成熟したもとの社会運動の原理の追求というところまでゆきついていません。というの

も、平田の社会主義論は、まずプロレタリアートが政治権力をとるところからしか社会革命は始まらない、とする伝統的な革命論の枠内にあり、そして権力奪取の後の社会主義において市民社会の復活を主張するものでした。けれども成熟した市民社会の下での社会運動は、平田が肯定している伝統的な革命論の枠組みそのものの組み換えを要求してしています。そして、この新しい社会運動の原理の追求はこの組み換えの努力としてなされる他はありません。ですからたしかに平田の市民社会論は生活クラブの指導者たちに大きな影響を与えたであろうが、しかしその影響の領域は社会主義論であり、現実の市民社会のもとの運動の追求というところでは平田自身、問題提起は出来ていず、むしろ80年代では平田が生活クラブを始めとする新しい社会運動（ヨーロッパの運動が中心）から学んでいったのではないかと思います。

そこで平田批判についてはこれ以上進めても意味がないと判断し、マルクスの価値形態論についての解説を試みてみました。これは教材として役立てることを目標に書いてみました。

あと、文化知の方法を明確にしてみると、マルクスの貨幣論についても一からの読みなおしが必要となってきました。今回はその第一回目として、価値尺度論を読みなおしてみました。

平田清明の物象化論の検討

1) 疎外＝および物象化視点

平田清明は自らの「疎外＝および物象化視点」を定義して次のように述べている。

「個と個との、したがって個と類との、関連の独自性を形成する社会的形態規定に対する関心が、近代市民社会において、この関連の物象化をみだし、そこに諸個体からの類の外化＝疎外を発見・確認し、このことのなかに近代社会の歴史的批判とそこへの批判的内在との原点を措定する方法的態度。これを私は疎外＝および物象化視点とよぶ。」（『経済学と歴史認識』10頁）

この定義のなかで平田は、近代市民社会では個と類の関連の独自性を形成する社会的形態規定が物象化としてあることと、この物象化が他ならぬ、諸個体からの類の外化＝疎外である、という思想を述べている。そこで平田が、物象化をどのように捉えているかが問題となる。

平田は『経済学と歴史認識』では物象化について、マルクスの『経済学批判要綱』、『経済学批判』、『資本論』という三冊の書物に則して自らの見解を明らかにしているが、ここでは『資本論』に則して述べている内容を検討してみよう。

2) 物神性論

平田は『資本論』に則した章に「物神

性世界の批判的省察」という題名を与えているように、他の諸著作と比較した場合に、『資本論』の商品論の特徴を物神性論に求めている。たしかに「商品の物神性とその秘密」というテーマは『資本論』では独立した節で論じられていて、物神性論の解明は『資本論』が先行する諸著作に対して持っている長所であることは間違いない。にもかかわらず、『資本論』の商品論について、まず物神性からとりあげ、ついで価値形態論の考察に移るという平田の展開には疑問を感じざるを得ない。ここには平田に独自の物神性理解があるのではなからうか。

平田は、商品の物神性とは何か、というについて

「問題は、この商品形態のもつ神秘性の根拠と特質にある」（306頁）とことわったうえで、商品の価値について考察し、日常語における価値という言葉が商品の交換能力を意味しているとしたうえで、次のように述べている。

「この獲得・支配力としての価値は、交換という人間の外面的行為において発現する力であるから、本来、外的な支配力であるが、商品の生産と交換に生きる人間にとっては、つまり私的個人にとっては、この支配力がおのれの生活と生産の不可避的な媒介者であるから、彼の内面生活にその作用をおよぼす。この価値と

いう支配力は、その対象物が無差別であり、その対象範囲は無限なものであるにもかかわらず、それはつねに一定量としてしか存在しないがゆえに、その本性は無限の量的増大という運動のうちだけに定在するものである。このゆえに私個人の内面には、これへの渴望と畏怖が不可避的に発生する。この畏怖と渴望が価値をして、私個人にとっての神的存在たらしめる。

価値にはこの意味での神的性格がそなわっている。価格のもつ神秘性は、価値の神性の対象的表現であり、しかもこの対象そのものの神性としての表現である。言いかえれば、価値が対象としての物の属性であるかのように見える。したがってまた、この物がその本来の自然的属性以上の力を、つまり超自然的な力を有するかのように見える。このような物が商品物神である。」(306～7頁)

平田もマルクスが、商品の物神性について、商品形態そのものから生じると述べていることを知っているはずである。しかしながら平田は自らの物神性論を展開するに当り、無差別な支配力、つまりは抽象的人間労働という価値規定の内容に神秘性の根拠を求めている。そして平田は価格の神秘性の根拠を価値の神性の対象的表現だというのが、これは見当はずれではなからうか。

そもそも、商品の価格の神秘性とは、貨幣の購買力が商品の価値表現の帰結であるとは見えず、貨幣そのものにそなわる力に見える、ということに他ならな

い。そしてこの貨幣物神は等価形態の謎的性格にもとづいていることをマルクスは簡単な価値形態の分析で明らかにしていた。

ところが平田にあっては物神性の世界を特徴づけるものは「物の支配と抽象の支配」(308頁)とされている。だから、価格のもつ神秘性は価値の神性の対象的表現だとみなされ、そして、価値の神性を無差別性に求めることになっている。

3) 価値実体に物神性を見る

平田はこの独自の物神性論を展開する際に、その独自範疇として、(1)「人間的労働力総体」＝「社会的生産有機体」—主体、(2)「抽象的・人間的労働」—実体、(3)「価値形態」＝「相対的価値形態と等価形態」—形態、の三項目をあげている。

この三項目のうち、物神性論に深くかわっているものは(2)項の実体論であり、(2)項の内容が(1)項の内容との関連で物象化として押さえられる。そして(3)項の価値形態論については次のように述べられている。

「価値形態論とは、近代市民社会における人間の行為連関が、商品の存在連関によって客観的に基礎付けられるものであると同時に、商品所有者としての人間の意識における意味連関によって直接に媒介されるものであることを、根底的に明らかにするものである。つまり、商品という物象の相互連関が、いかなる形相として客観的に現われるかを追求することによって、意識活動をふくむ人間的行

為が近代市民社会においてはいかなるものとして現われざるをえないかを、究明するものである。

一言をもって言えば、『物象の人格化』の客観的基礎を開示するもの、それが価値形態論なのである。」(328頁)

平田にあっては、価値形態論とは、物象の人格化の客観的基礎を開示するものとされ、物象の人格化の原理そのものは、(2)項の実体論ですでに導かれている、というようになっている。進んで(2)項の内容をみてみよう。

4) 抽象化の意味

平田は「抽象的・人間的労働」を考察するに当り、次のように社会的分業を前提においている。

「この近代に固有な『商品』の世界では、人間的労働は『商品で表示される労働』としてのみ存在する。なぜに、人間的労働が人間の生き身(精神と肉体)の活動そのものの現実性として現われないで、『商品』という『物』のかたちをとってのみ、『商品体』としてのみ現われるのか、その理由は、近代市民社会が私的所有としての社会的分業の体制だからである。」(321頁)

市民社会における社会的分業のもとで、労働生産物を生産した人間がそれらを商品として相互に対応させるとき、価値としての相互連関がそこにある。平田は「商品集合としてある市民社会においては、物たる商品が交換力能＝価値を有し、相互にその力を作用しあう」(321頁)

というようにこの相互連関を捉えたうえで「価値とはほんらい、同等化力なのである」(322頁)と指摘している。

そのうえで、かんじんの物象化について次のように展開している。

「商品関係または交換関係は、労働生産物が商品としてたがいに同等化力をおよぼしあっている関係である。この関係を価値関係という。

したがってこの価値関係すなわち同等化関係にある以上、そこに存在するすべての労働生産物は、それらがそこに商品として存在するという、ほかならぬとの理由のために、すでに同等なものにされている。言いかえれば、それらの諸労働生産物の差別的特質は、捨象されている。したがってそれらの労働生産物は、同等な質に抽象されている。それらの物は、同等な質の労働の所産だ、とされてしまっている。重ねていおう。労働生産物たる商品が、物たる商品にふさわしく交換力能＝同等化力を発揮することによって、おのれみずから、自分は同等な質の労働の所産だ、と語りだすのである。もはやたんなる物ではなく、人間としての同等な労働だ、とみずから語るのである。このことによって、商品はその人間的本質に『還基』するのである。つまり『復位』するのである。……(中略)……

この還基によって、歴史の主体たる人間的労働が、復位する。ただし、つぎのような形態規定をとって、——『同等性』と『抽象性』の形態。つまり復位した歴

史主体は『同等な人間的労働』として現われる。」(323頁)

マルクスにあっては物象化と物神性とは区別されている。平田が物神性だと捉えている「物の支配と抽象の支配」はマルクスにあっては物象化であり、そして、その基本的な内容は簡単な価値形態で価値形態の秘密を解くことで明らかにされている。そして、物神性は先にも指摘したように、等価形態の謎性として、その根拠が解かれている。つまり、平田は『資本論』では区別されている物象化と物神性を区別せずに論じている。

というのも、平田にあっては、物象化とは、人々の労働生産物を通しての関係が物の関係に転化される、という枠組みで理解されていて、この物の関係が物神性をもつと捉えられているからである。そして、平田説の特徴は、人々の労働生産物を通しての関係が物の関係に転化される際にそこに同等化関係が成立し、労働生産物が無差別な人間的労働に抽象されるが、しかし、この抽象化を通して商品はその人間的本質に還基し、こうして歴史の主体たる人間労働が、同等な人間的労働という形態ではあれ、復位される、とみるところにある。

だから平田にあっては「価値とは、市民社会の『社会的実体』として、商品関係＝交換関係がみずから遂行するところの、異種諸商品の社会的同等性への還基にほかならなかった」(326頁)とい

うことになり、価値の実体が抽象的人間労働であることを示すことが物象化と物神性の解明の中心におかれてしまうのである。

5) 価値形態論

では平田が物象の人格化の客観的基礎を開示するものと捉えている価値形態論はどのように展開されているのだろうか。

「交換過程における私的諸個人の行為が無自覚的な行為連関を形成することの、客観的な意義とその人間的必然性を、理論的に明示することこそが、価値形態論の直接の、そして最深の課題である。」(330頁)

つまり平田にとっての価値形態論とは貨幣生成論だということになる。

例えば平田は、マルクスが「あらゆる価値形態の秘密が潜んでいる」と指摘している簡単な価値形態について5頁にわたって解説している。しかしその結論部分で「すべて商品たる物が、価値関係におかれるとき、商品の価値で表示される労働は、すでに人間的労働に還基しているものであり、そのようなものとして全く同等なものであり、同等な意義＝妥当性を有するということが、この価値表現そのものによって語りだされるのである」(353頁)と述べられているように、平田にあってはすでに価値実体論で明らかにされている物象化の原理が価値形態論ではたんに表現形態をもつとされているにすぎないので

ある。

従って貨幣生成論についても『経済学批判』レベルの解釈しか見い出せていない。平田によれば「商品の交換関係の矛盾は、商品自体によって解決され」(338頁)ず、商品所有者という「形態の人間の実践的行為によってのみ解決されるのである」(338頁)が、その行為こそが一つの商品の商品世界から排除する行為である。ところでこの行為は意識的な合意によるものでもなく、一人の王の命令によるものでもない。

「人々が交換という日常的な行為を繰り返さずなかで、これを通じて、この排除にいたりつくのである。排除の必要を自覚的に意識するまえに、すでにこの排除行為を遂行してしまっているのである。」(338頁)

このように言ってみるところで、商品所有者が行う「かの共同主体的な排除行為の原理論的基底」(341頁)を明らかにしたことはないことを当然平田は自覚している。そこで進んで人格の物象化を解明している。

平田は人格の物象化を人間的労働が商品として関係させられること自体に求めている。だから、人格の物象化とは平田にあっては次の内容に帰着する。

「市民社会においては、人格が物象化するとき、まさにそのとき、人格は抽象化する。歴史の主体をなす現実的諸個人(その総体としての人間的労働)の活動が価格形態という物象的形態をとって現われるとき、そのときまさに、現実的人

間は抽象的人間に還元させられている。抽象的な労働に参加しているという意味での、抽象的人間労働に還元されている。このゆえに市民社会では、抽象的にのみ人格関係が措定され、社会的妥当性をみとめられる。」(355～6頁)

平田にあっては人格の物象化とは人格の抽象化のことであった。そうである限り、その内実は価値実体で解明ずみとされ、価値形態論の課題は設定しようがなくなる。したがって平田自身が解明しようとした物象化論を価値形態に則して解くことは平田にあっては未決となっている、ということであり、この課題が解決されなければならない。その前に、平田の Kommunismus 像を見ておこう。

6) Kommunismus

人格の物象化を人格の抽象化に求めた平田は、次に市民社会においては生産と交換とが、配分と消費とが経験的に分離するとみなしている。そして市民社会の人間は、社会の再生産諸関係の諸商品を断片的分散的に生きざるをえない。「しかしながら、生産、交換、消費の分裂をうみだした根拠、つまり私的所有としての社会的分業そのものが、その過程的統一をもとめるほかないがゆえに、市民社会における人格はたんに分裂的諸人格性であるのではない。不断に統一的人格性たろうとするものである。」(356頁)

このように市民社会のうちに、分裂的諸人格性と、統一的人格性たろうとする欲求を見いだした平田は Kommunismus を

次のように規定する。

「この不断に統一的人格性を獲得しようとする人間的欲望は、その実現を客観的に妨げている諸条件、つまり私的所有としての社会的分業が、揚棄されることによってのみ、はじめて実現する。これまで類体における個体としての現実性を私人性のうちに犠牲にすることによって、ひとは、抽象的な協同本質すなわち人間性を獲得してきたのであるが、この人間性を、私的所有の揚棄すなわち私人性の廃絶によって、現実性として獲得していくこと。これがマルクスの Kommunismus である。」(356頁)

平田の Kommunismus 像は私的所有の揚棄であった。これは当然にもプロレタリアートの独裁の下で実現されていく。書かれた時期からして仕方ないが、これは権力奪取からしか社会革命は始まらないとする伝統的な革命論の枠内にある。平田はせっかく『資本論』の価値形態論に注目しながらも、しかし、その独自の意義について考察するところまで進みえなかった。というもすでに見たように、平田の物象化論は、価値実体論で完成させられており、物象化の原理を価値形態論のうちに求める、という問題意識にまで到達していなかったのがあった。

7) 市民社会論

平田の市民社会論については最初は独立の論文にする予定であった。しかしながら平田の物象化論が価値実体論を素材に組み立てられていることが判明したい

ま、市民社会論批判に多くの頁をさく必要性が感じられなくなった。とまれ、簡単にコメントしておこう。

平田はマルクスの社会概念には「商品経済社会」や「資本主義社会」といったものはなく、あるのは「市民社会」と「資本家社会」だとし、そしてマルクスの『資本論』は、「市民社会の資本家社会への転成の過程」(『市民社会と社会主義』52頁)を明らかにしたものだと言っている。

平田によれば「市民社会の資本家社会への不断の転成の過程として、現実の市民社会は存在するのであり、同じく、そのようなものとして現実の資本家社会が存在する」(52頁)のであって、今日では現実的な社会形成は、「市民社会という第一次社会形成の資本家的な第二次的社会形成への不断の転成」(53頁)として展開している、というのである。

平田が想定する市民社会とは、「何よりもまず交通的社会」であり、「私的諸個人が対等な所有者として自由に交流しあう社会」であり、「同市民関係そのもの」(56頁)なのである。ここに成立しているものは「個体的所有」であり、自己労働にもとづく所有(他人を雇用しない)である。個体的所有に関して平田は次のように述べる。

「生産において自由に考え理解し行動しえてこそ、交通において自由に自由に考え理解し行動しうるのである。そして生産と交通においてこのように関係行為しえてこそ、消費において自由な選択と

享受が可能になるのである。」(57頁)

ところが「市民的生産様式において成立する個体的所有は、現実には『私的所有』としての形態規定を受けている。」(57頁)私的所有とは排他的なものであり「生産と生活における共同性を排除することによって、他人を排除するだけでなく、おのれ自身をおのれ的人間的=共同的本性から排他するもの」(57頁)であるとされる。

つまり「市民的生産様式は、何よりもまず、自主独立の労働過程によって特色づけられるのであるが、抽象的な価値の生産過程を展開することによって、個人の労働生産物を、さらには他人の労働を、購買=支配するという独自の領有様式をうみだす」(58頁)ものとされている。だからこの次元でも不平等が生じ、富者による貧者の支配が生じる。

さらに「市民的生産様式はそれ自体の競争的自己展開において、自己解体的な運動を展開する。」(58頁)ものとされている。そしてこの競争において「駆逐された旧生産者を、市民的交通形態を経て、おのが生産過程のなかに包摂する。ここにおいて市民的生産様式は、資本家的生産様式に転変する。」(59頁)

以上が平田の市民社会論の概略である。

8) 市民社会と社会主義

平田は市民社会の資本家社会への転変によって、階級支配が成立するが、しかしそこでも、自己労働にもとづく所有と

いう市民的な交通様式、「自由・平等という市民的原理が形式的に保存されている」(59頁)ことに注目し、この形式化されている市民的原理を私的所有の揚棄によって実質化し、そして個体的所有を再建することが本当の社会主義だ、と主張している。

つまり平田は政治権力を奪取し、ブルジョア階級から生産手段を収奪してプロレタリアートの独裁を樹立する、という革命の戦術を認めたくらんで、実現すべき社会主義社会は何よりもまず市民社会の継承であるというのであった。したがって平田の市民社会論は当時の社会主義思想に対する批判として有効であったものの、資本主義社会における社会運動の原理として打ち立てられたものではなかったのがあった。

平田清明は社会主義社会における市民社会の継承を主張したため、市民社会と資本家社会との対比を行うさいに、どうしても市民社会の長所のみをとり出すことにならざるを得なかった。

とはいえ、人々の現実の生活過程が社会形成の過程であることを示した点で、平田の提起は新しい社会運動の原理へと体系化されていく端初を切り開いていた。だが、この体系化のためには市民社会についての批判が必要であり、平田が「具体的な人間がひらの市民として相互に自立して対応し、その所持する物を、したがって意思を、交通しあう社会である」(86頁)と肯定的に理解した事態の否定面を、つまりは商品に対する原理的

批判が必要である。

平田の物象化論が価値実体論の次元で完成していること、ここから、商品交換によって、商品が抽象的人間労働という物象化された形であれ、人間を復位するとみなしたことで、平田は商品経済の下での人間の意思の自立を疑うところまでは進めなかった。ここに平田の市民社会論が、自立した市民によって構成されてしまう要因がある。しかしながら物象化

を商品や貨幣といった物象による人格の意志支配と捉えるならば、市民社会の市民には政治的自由はあるが意思の自立はないということが判明する。そして、この見地からの市民社会批判こそがいま問われているのである。マルクスの『資本論』に則って価値形態論を解説し、これを市民社会批判として構成する作業に移ろう。

商品の原理 —価値形態論の解説—

はじめに

お金に魔力があることは誰でも知っている。それは人をひきつける力を持ち、また人をだます力も持っている。この力がお金にどうしてそなわるようになったのか。マルクスの『資本論』は、資本家的生産の仕組みの基本を労働力が商品化し、売買されることに求め、ここから資本が自己を増殖していく過程を明らかにし、貨殖の秘密を解明したことで知られている。だがこの『資本論』は商品から説き起こされ、商品から貨幣が生成され、そして貨幣が資本に転化することを明らかにしている。にもかかわらず、従来ここで述べられている商品の原理についてはあまり注目されてこなかった。

お金に人を支配する力があり、(物象化)そしてこの力がお金(日銀券)そのものにそなわっているように見える(物神性)、ということは日常の生活感覚にとっては当たり前のことだから、この原因を明らかにする試みがなされていたとしても、人々の注目を集めなかったのは当然のなりゆきだったのかも知れない。

しかし、今日、環境問題が資本の自己増殖を野ばなしにしてきたことを反省させ、また協同組合などのNPOが次世代の社会システムとして注目されるように

なっているなかで、お金(資本)に使われるのではなく、逆にこれをコントロールすることが課題となってきている。お金をコントロールする、という課題を解決しようとするれば、何故お金に人を支配する力がそなわるのか、つまり人格の物象化、物象の人格化ということについて明らかにすることをせまられる。

そこで『資本論』で明らかにされている商品の価値形態論を解説することで商品の原理を明らかにし、お金に人を支配する力がどのようにしてそなわるかについて理解を深めていくことにしたい。そしてこの理解が深まれば、お金にそなわる力を弱めていくことで、これをコントロールする方法が明らかになるであろう。

ところで『資本論』の価値形態論は従来、研究者にとっては謎となっていた。『資本論』の商品論は、(1) 価値実体論、(2) 労働の二重性論、(3) 価値形態論、(4) 物神性論、と続き、これに(5) 交換過程論、(6) 貨幣論、(7) 貨幣の資本への転化、が説かれて資本の生産過程の導入が終るのであるが、商品論では、(1)、(2)はそれなりに理解が進んでいるが、(3)、(4)に関しては、ほとんど理解されないままなのである。

そこで今回は、(1)と(2)に関しては、

『資本論』で展開されている内容を引用(但し引用符は省略)または要約し、(3)の価値形態論について解説を進めていきたい。そうすることで、(4)物神性論と(5)交換過程論についての新しい読みも提示していく。

1) 商品の二要因 —使用価値と価値—

商品は使用価値と交換価値という二要因からなっている。商品とはまず人間にとって有用な物である。ある物の有用性とはその物を使用価値たらしめる。次に交換価値はさしあたりある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、比率として現象する。

使用価値は使用または消費によるのみ、みずからを実現する。だからそれは富の内実であるが、今日の社会ではそれが同時に交換価値の質的担い手をなしている。

ある特定の商品はこの諸商品とさまざまな比率で交換されるので多様な交換価値をもつ。この多様な交換価値はみな同じ量の商品の交換価値だから互いに同等な大きさの交換価値である。だから第一に同じ商品の妥当な諸交換価値は、一つの同等なものを表現する。ところが第二に交換価値は、それとは区別されるある内実の表現様式、すなわち現象形態たりうるのみである。

この「ある内実」は二つの商品の交換関係のうちで分析によって発見しうる。例えば一クォーターの小麦 = α ツェント

ネルの鉄という関係では、小麦と鉄という二つの相異なる物のうちに同じ大きさをもつある共通者がそれぞれ実存していることを示している。だから、小麦も鉄も共通な第三者に還元されうるものでなければならない。

この共通者は使用価値の差異とかかわりがない。それで商品体から使用価値を度外視すれば、そこに労働生産物だという属性だけが残る。この属性も使用価値を度外視しているとその諸労働の有用的性格が消失され、その具体的形態も消失され、もはや諸商品はたがいに区別がつかなくなり、すべて残らず同等な人間的労働、すなわち抽象的・人間的労働に還元されている。

商品体のうちに残っているこの抽象的な労働生産物というものは、幻影のような同じ対象性に他ならず、無区別な人間的労働の・すなわちその支出の形態に係わりのない人間的労働力の支出の・単なる凝結に他ならない。これらの物は、それらに共通なかかる社会的実体の結晶としては、価値—商品価値である。

こうして商品の交換関係または交換価値が表示している共通者は商品の価値である。だからある使用価値または財がある価値をもつのは、そのうちに抽象的・人間的労働が対象化または物質化されているからに他ならず、そしてその価値の大きさは、それに含まれる労働の分量によって決定される。といってもこの労働の分量は個人の労働量ではなく、社会のうちで成立している社会的な平均労働

働力が働く社会的に必要な労働時間である。ある使用価値の価値の大きさを規定するものは、社会的に必要な労働の分量、または、その使用価値の生産のために社会的に必要な労働時間に他ならない。一商品の価値の大きさは、その商品でみずからを実現する労働の分量に正比例し、生産力に逆比例して変動する。

ある物は、価値であることなしに使用価値でありうる。また労働生産物の場合でも、自己消費され、他人のための使用価値とならないものは商品にはならない。また物が無用であれば、それに含まれている労働も無用であり、何らの価値も形成しない。

2) 商品で表示される労働の 二重性格

商品の二要因は商品で表示される労働が二重の性格をもつことを意味している。

商品上着は一つの特異的欲求を充たす使用価値である。それを作りだすためには、ある一定種類の生産的活動が必要である。その活動の有用性がその生産物の使用価値で表示される労働を有用的労働と名づける。

相異なる種類の商品体の総体のうちには、種類を異にする有用的労働の総体、社会的分業が現象している。社会的分業は商品生産の実存条件であるが、逆に商品生産は社会的分業の実存条件ではない。自立的な・相互に独立的な・私的諸労働の産物だけが、相互に商品として対

応する。

そこで使用価値をつくる有用的労働について考察してみると、それは人間のどんな社会形態とも係わりのない生存条件であり、人間と自然とのあいだの質料交換・つまり人間の生活・を媒介するための永久的な自然的必然性である。使用価値としての商品体は、自然質料と労働という二つの要素が結合したものであり、人間はその生産においては、自然そのものと同じように振るまいうるのみ、すなわち質料の形態を変化させるのみである。労働は質料的富の父であり、土地はその母である。

次に商品価値に移ろう。価値としては上着とリンネルは同等な実体からなる物であり、同等な種類の労働の客観的表現である。しかし裁縫業と織物業とは質的に異なる労働である。けれどもこれらはいずれも人間の脳髓、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、かかる意味で、いずれも人間的労働である。それらは人間的労働力を支出するための二つの異なる形態に他ならない。

この人間的労働とは平均的に誰でも普通の人間が特異的発達をまたないでその肉体のうちにもっている簡単な労働力の支出であり、これはある当面の社会では与えられている。他方複雑労働は倍加された簡単労働として意義をもち、社会的過程で簡単労働に還元される。

だから諸商品の価値で自らを表示する諸労働にあっても有用的形態が捨象され、双方の労働が同等な質を、人間的労働

働という質を有することを示している。

ところで労働の生産力は常に有目的・具体的労働の生産力であり、有目的労働はその生産力の増大または低下に正比例して、生産物の量を定める。しかし生産力の変動は価値で表示される労働とは絶対的にまったく無関係であり、同じ労働は生産力がいかに変動しようと同じ時間内にはつねに同じ大きさの価値を生むが、しかしそれは同じ時間内に相異なる分量の使用価値をもたらす。

およそ労働は一方では、生理学的意味での人間的労働力の支出であって、同等な人間的労働または抽象的・人間的労働というこの属性においては、商品価値を形成する。およそ労働は、他方では、特殊な・目的を規定された・形態での人間的労働力の支出であって、具体的・有目的労働というこの属性においては、使用価値を生産する。

3) 価値形態または交換価値

(1) 価値形態の5類型と価格形態

商品は使用対象であると同時に価値の担い手である、という二重的なものであるが故にのみ商品である。だからそれは、自然形態および価値形態という二重形態をもつかぎりでのみ、商品として現象するのであり、商品の形態をもつのである。これまでのところで商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている商品価値の足跡を発見した。いまや価値の現象形態にたち戻らなければならない。

価値形態論の課題の一つは貨幣形態の発生史を証明することであり、商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、その最も簡単な見すばらしい姿態から、さんらんたる貨幣形態までたどることである。それによって同時に貨幣の謎も消滅する。もう一つの課題は価値形態の秘密を解き明かすことによって人格の物象化、物象の人格化の原理を明らかにし、物象化論を確立して、物神性批判をなしとげることである。まず、価値形態の5つの類型と価格形態とをあげよう。

A) 第I形態 (簡単な価値形態)

20 エルレのリンネル = 1 枚の上着

すべての価値形態の秘密は、この簡単な価値形態のうちにひそんでいるにちがいない。

B) 第II形態 (全体的な価値形態)

20 エルレのリンネル = 1 枚の上着

= 10 ポンドの茶

= 4 ポンドのコーヒー

= ……

ここではリンネルの価値がはじめて真に価値として、すなわち人間的労働一般の結晶として示されている。

C) 第III形態 (一般的な価値形態)

1 枚の上着 =

10 ポンドの茶 =

4 ポンドのコーヒー =

…… =

} 20 エルレのリンネル

上着をすべての他の商品にたいしても価値として示しており、したがってまた、それは上着の普通妥当な価値形態な

のである。ただ上着だけでなく、コーヒー、茶、等々、要するにすべての他の商品が、それらの価値をいまではリンネルという材料で表現している。こうしてすべての商品が互いに自分を人間的労働の同じ物質化として示している。

D) 第IV形態 (初版本文第IV形態)

20 エルレのリンネル = 1 枚の上着

= 10 ポンドの茶

= 4 ポンドのコーヒー

= ……

1 枚の上着 = 20 エルレのリンネル

= 10 ポンドの茶

= 4 ポンドのコーヒー

= ……

10 ポンドの茶 = 20 エルレのリンネル

= 1 枚の上着

= 4 ポンドのコーヒー

= ……

どの商品でもがそれ自身の現物形態をすべての他の商品にたいして一般的な等価形態として対立させるとすれば、すべての商品がすべての商品を一般的な等価形態から除外することになり、したがってまた自分自身もその価値の大きさの社会的に認められる表示から除外することになる。

D) 交換過程と貨幣形態

はじめに行為ありき。彼らは考えるより前に、すでに行っていたのである。商品の本性の諸法則は、商品所有者たちの自然本能において自分を実証している。……ただ社会的な行為だけがある特定の商品を除いて、この商品においてすべて

の他の商品が自分たちの価値を全面的に表わすのである。

20 エルレのリンネル =
1 枚の上着 = } 2 オンスの金
10 ポンドの茶 =
…… =

F) 価格形態

20 エルレのリンネル = 5 万円

(2) 価値形態の秘密と謎

—簡単な価値形態の解説—

簡単な価値形態 20 エルレのリンネル = 1 枚の上着。あらゆる価値形態の秘密は、この簡単な価値形態のうちに潜んでいる。ここでは二つの相異なる種類の商品、リンネルと上着とがあきらかに二つの相異なる役割を演ずる。リンネルはその価値を上着で表現し、上着はこの価値表現の材料に役立つ。第一の商品は能動的な役割を演じ、第二の商品は受動的な役割を演ずる。第一の商品は相対的価値形態にあり、第二の商品は等価形態にある。これらは価値形態の両極をなす。

さきに価値の実体としての抽象的な人間労働が幻影のような対象性であるとされていた。したがってそれは感性的に捉えられるものではない。とすれば価値形態も超感性的な現象形態であることが予想される。では超感性的な現象形態はどのようにすれば捉えられるのか。なによりも二つの商品の関係という感性的に捉えられるものを手がかりにする他はな

い。

リンネルの価値が上着に値する、というこの簡単な価値形態の意味は、リンネルと上着とに共通な第三者、価値実体の存在を予見させる。しかし今はこの関係のうちに、この実体がどのようにして現象しているかを知ることが課題となっている。

リンネルが上着と関係することができたのは、自分に、自分に等しいものとしての上着を等置することができたからであった。この自分に等しいものとは価値に他ならない。だからこの関係によって、まず第一に、リンネルは他の商品を自分に価値として等置することによって、価値としての自分自身に関係する。第二に、リンネルは価値としての自分自身に関係することによって、同時に自分を使用価値としての自分自身から区別する。第三にリンネルは自分の価値の大きさを上着で表現することによって、自分の価値存在に自分の直接的な定在とは区別される価値形態を与える。

リンネルの使用価値が一つの物として自立して存在しているのに対し、リンネルの価値は、ただ他の商品にたいする関係のなかにおいてのみ現われる。だから商品の交換価値は価値の現象形態を含んでいるが、しかしこの現象形態は超感性的である。

なぜか。リンネル価値の上着での表現は、上着そのものに一つの新しい形態を刻印する。リンネルとの価値関係のなかでは、上着はその自然形態において、他

の商品との直接的交換可能性の形態をもつ。リンネルを抽象的人間労働に還元するにはリンネルを物にしている要素を思考によって抽象していけばよかった。しかしここに得られる抽象的・人間的労働は一つの思考産物であった。ところがここで起きている事態は、自分に等しいものとしての上着を自分に等置することで、リンネルをつくる労働が上着に反射され上着で示されることで上着をつくる労働を抽象すると同時に、この抽象化した上着で自らを表現することで、リンネルをつくる労働を抽象している。ここには思惟抽象とは異なるものとしての事態抽象がある。

上着が自然形態のうえに一つの新しい形態を刻印されるということはこの労働の事態抽象のうちで起こる。リンネルの価値をつくる労働が上着に反射されることで、上着はただ人間的労働が凝固している形態として意義をもち、価値の化身とされる。これが上着に対する社会的形態規定の内実であり、上着が自然形態のままに超感性的な現象形態に組み込まれているのである。

こうして価値形態の秘密が開示される。ある使用価値または商品体が価値の現象形態または等価物となるのは、ただ、別のある商品が、前記の商品体に含まれている具体的有用的な労働種類に・抽象的・人間的労働の直接的実現形態としての具体的有用的な労働種類に・連関する、ということによってのみである。

関係は差異を表現しているが、しかし

同一性がなければ関係そのものが成立しない。関係における同一性は思考のように差異あるものの共通性を分析によって抽出することによって得られるものとは異なる。それは関係のなかで抽象しあい、そして超感性的な現象形態を生成することで感性的に把握しうる両極の形態規定としてあらわれる。上着はリンネルとの関係で形態規定(新しい超感性的な形態を受けとる)され、上着が上着のままに価値の化身とされている。

(3) 価値表現の回り道

価値形態の秘密については、従来一商品の価値は他の商品の使用価値で表現されること、とみなされてきた。しかし、この指摘だけではかんじんの価値表現のメカニズムが捉えられていない。他の商品の使用価値で表現されている、という事態のなかに、超感性的な現象形態を発見することが問われていたのである。

リンネルが自分に上着を等置することは、上着に含まれている労働をリンネルに含まれる労働に等置することである。リンネルを見ればリンネルに含まれる有用的な労働を想像できるし、上着を見れば上着に含まれる有用的な労働を想像できる。しかし、今ここで起きている事態は、リンネルを見て上着に含まれている労働を想像することである。リンネルを見ても上着に含まれている有用的な労働を想像することはできず、従って上着含まれている有用的な労働は、この等置の関係にあっては抽象されざるを得ない。

この等置の関係は上着に含まれている労働を抽象しているだけではない。同時にリンネルは、この抽象化された上着に等しいのだから、リンネルに含まれている労働も、こうした回り道をして抽象化される。関係の両極はお互いに抽象しあうが、しかしそのメカニズムは等価形態にある上着を抽象的・人間的労働の体化物として形態規定することで成立する超感性的な現象形態を成立させることによってであり、相対的価値形態にあるリンネルは、価値の化身として形態規定された上着と関係するという回り道をして、自分の価値を表現するのである。

(4) 物象化の原理と物神性

一商品リンネルはその価値を相異なる種類の一商品上着の使用価値で表現することにより、上着そのものに独自の価値形態を、等価たる形態をおしつける。といってもこの形態は超感性的である。しかしこの等置の関係はリンネルが、上着は直接にリンネルと交換されうるものだ、ということによって、それ自身の価値存在を表現しているのであり、したがって、一商品の等価形態とは、その商品の、他の商品との直接的な交換可能性の形態である。

等価形態にあっては使用価値がその対立者たる価値の現象形態になっているが、上着が価値の化身となっているのは、リンネルとの等置の関係の内部のみである。ここでは上着がそのままに価値形態となり、購買力をもつ。にもかか

ならずこの購買力は上着そのものに属するように見える。

というのも上着がリンネルに等置されることで上着が受けとる形態規定は超感性的なので、この等置によって上着に与えられる直接的な交換可能性、という社会的力が、上着という使用価値そのものから生じるように見えるのである。

これが等価形態の謎性であり、商品の物神性の秘密である。そして、この物神性を人間の頭に生じさせるような超感性的な現象形態の成立が物象化の原理をなしている。等価形態にある商品上着の購買力という社会的な力は、上着がリンネルに等置されることで発生する目に見えない現象形態がもたらしているのである。

等価形態にあつては、第一に使用価値がその対立者たる価値の現象形態になり、第二に具体的労働がその対立者たる抽象的・人間的労働の現象形態になり、第三に、私的労働がその対立者の形態になり、直接的に社会的な形態をとる労働になる。

上着がこのように形態規定されるのは、リンネルが上着に働きかけて、上着で自らの価値を表現したからであったが、この現象形態は超感性的だから、人間の眼には購買力が上着という使用価値自体に属するように見える。

しかし、この物神性の秘密を解きあかし、超感性的な現象形態を描き出すことに成功したとき、そこに出現するものは、使用価値が価値の現象形態となり、

具体的な労働が抽象的・人間的労働の現象形態となり、私的労働が直接に社会的な形態をとる労働になるという奇妙な事象である。ここに物象化の原理がひそんでおり、そしてこの原理は価値形態の発展による貨幣の生成において現実化していく。

(5) 価値形態の発展

第Ⅱ形態にあつてはリンネルの価値は商品世界の他の無数の商品体で表現されている。ここではリンネルの価値そのものが初めて真に無区別な人間的な労働の凝結として現象している。リンネルはその価値形態によって商品世界と社会的関係を結んでいる。さらに商品価値の表現の系列が無限であることで、商品価値はそれがそこで現象する使用価値の特殊な形態には無関心である。

ところがこの形態にあつては商品の相対的な価値表現は、その表示系列がけっして終結しないがゆえに、未完成である。次にこの鎖はバラバラで様々な種類の価値表現の雑然たる寄木細工をなす。最後にどの商品の相対的な価値形態も、この形態で表現されるが、その場合には、各商品の相対的な価値形態は他の商品のそれとは異なる価値表現の無限の一系列となる。

他方等価形態の方では無数の特殊な等価形態とならぶ一つの等価形態だから、そのいずれもが他を排除する限定された等価諸形態となる。そして、等価形態は抽象的・人間的労働の現象形態に

なつてはいるものの、それを表示する具体的有用労働種類は多様で、統一的な現象形態をもてていない。

ところが第Ⅱ形態は、第Ⅲ形態を逆の関連で含んでいる。この第Ⅲ形態にあつては諸商品はいまやそれらの価値を簡単に単一の商品で表示し、かつ同じ商品で統一的に表示する。第Ⅲ形態では商品世界の諸価値を商品世界から隔離された一個同一の商品種類たとえばリンネルで表現し、かくして、すべての商品の諸価値を、それらの価値のリンネルとの同等性によって表示する。各商品の価値は、いまやリンネルと同等なものとして、その商品じしんの使用価値から区別されているばかりでなく、およそ使用価値から区別されており、また、まさにそうされることにより、その商品とすべての商品とに共通なものとして表現されている。だから、はじめてこの形態が、現実的に、諸商品を相互に交換価値として現象させるのである。リンネルと同等なものという形態において、いまやすべての商品が、質的に同等なもの・価値一般・として現象するばかりでなく、同時に、量的に比較されうる価値の大いさとして現象する。

(6) 一般的等価形態の矛盾 (形態Ⅳ)

商品世界の一般的な相対的な価値形態は、商品世界から排除された等価商品たるリンネルに、一般的な等価という性格をおしつける。リンネルの物体形態が、あらゆる人間的労働の眼に見える化身と

して意義をもつ。この一般的等価としてあらわれる商品は、商品世界の統一的な・したがってまた一般的な・相対的な価値形態から排除されている。

つまりある一つの商品がすべての他の商品との直接的な交換可能性の形態をとっており、したがってまた直接的に社会的な形態をとっているのは、ただすべての他の商品がそのような形態をとっていないからであり、またそのかぎりにおいてのみのことである。しかし一般的等価物、つまり一般的な直接的交換可能性を表示する形態をみても、それが一つの対立的な商品形態であつて、非直接交換可能性の形態と不可分であることは実際にはけっしてわからない。それだから、すべての商品に同時に直接的交換可能性の刻印を押すことができるかのように想像することができる。

だが、すべての商品を一般的等価物にたらしめようとすれば、形態Ⅲを転倒した形態Ⅳが得られる。ここでは一般的な等価は、他の諸商品と共同的な相対的な価値形態をとらないのであつて、その価値は他のすべての商品の無限の系列においてみずからを表現する。

このようにどの商品でも一般的等価物にすることができるが、それは一つの系ではただ一つの商品がなれるだけだから、それは一般的な等価物の独自に相対的な価値形態に一変し、商品の数だけの系に分かれ、一たん成立した商品世界の統一的な秩序は解体される。

4) 交換過程

(1) 貨幣の生成

商品は使用価値と交換価値の二要因からなっていた。この二つの対立物の統一としての商品をこれまでは交換価値の観点のもとで考察してきた。しかし現実商品が他の諸商品と関係させられるとひとつの発展が起こる。諸商品の相互の現実の関係は諸商品の交換過程であり、ここで貨幣の生成という発展が起きる。

商品とはその所有者にとっては非使用価値であり、その非所有者にとっては使用価値である。だからそれらは全面的に持手を変換しなければならず、この持手変換は諸商品を価値として相互に関連させ、それらを価値として実現させる。だから諸商品は、自らを価値として実現しうる前に、使用価値たる実を示さねばならない。

商品所有者は自分の欲望を満たす使用価値をもつ他の商品と引換えにのみ、自分の商品を譲渡しようとする。他方で彼は自分の商品で他の必要な諸商品との交換を実現しようとする。ところがこれは自分の商品を一般的等価物にしようということだから、誰もがそのようにふるまうと、第IV形態が出現し、生産物は諸商品として関係することができない。わが商品所有者は当惑してファウストのように考える。はじめに行為ありき。かくして彼らは考えるよりも前にすでに行動したのである。商品本性の諸法則が、商品所有者たちの自然本能において自らを実証したのだ。彼らは、彼らの諸商品を

一般的な等価としての何らかの他の商品に対立的に関連させることによってのみ、それらを価値として、したがってまた商品として、相互に関連させることができる。このことは商品の分析によって明らかにされた。だが、ある一定の商品を一般的な等価物たらしめうるものは、社会的行為だけである。だから、他のすべての商品の社会的行動が、それらの商品が自分の価値を全面的に表示するための、ある一定の商品を排除するのである。かようにして、この商品の自然的形態が、社会的に妥当な価値形態となる。一般的な等価たるものが、社会的過程によって、その排除された商品の独自の・社会的な機能となる。かくしてその商品は貨幣となる。

貨幣を生成することで、交換過程の矛盾は解決される。諸商品は自らの価値を貨幣で表現することで、自らの使用価値として実現しうる前に価値として実現し、そして貨幣という回り道をへて、諸商品はお互いに社会的分業にもとづく有用な使用価値であることを示している。

(2) 物象の概念的構造

マルクスの貨幣生成論のポイントは、商品所有者を自分の意志を商品に宿す人格として捉えるところにある。商品所有者がこのような存在だからこそ、「はじめに行為ありき」が実現したのである。「商品本性の諸活動が、商品所有者たちの自然本能においてみずからを実証した」と述べられているのも、このことと

関わっている。

ところで商品所有者がその意志を商品に宿すことが出来るためには、商品という物象自体が何らかのサインを送っていなければならない。商品が自分の価値についてサインを送るためには、あたかも諸商品は人間のように思考し、判断できなければならない。

概念を得るためには、諸商品はリンネルとか上着とかの差異を抽象し、同一性をとりだし、この同一性を判断の形式で提示しなければならない。商品の価値形態こそは諸商品がお互いに関係をとり結ぶことでお互いに抽象し、その価値の大きさを等価商品の体で示す。こうして人は安心して、商品にその意志を宿すことができる。

(3) 無意識のうちでの本能的共同行為

商品に意志を宿す商品所有者はこの過程に対し、どのような意識をもつだろうか。商品に意志を宿すことで貨幣が生成されるとすれば、人間が物象に意志を支配されることで貨幣に人を支配する力を与えることになる。だから物象化とは物象による人格の意志支配である。ところがこの意志支配は人々には意志支配とは意識されない。

人が人に支配されるときは支配-被支配の関係は意識される。しかし水が流れるような自然法則に支配されても、人々はそれに順応するだけで、ここに支配されているという意識は生まれず、商品に意志を宿す場合も同様である。

さらに、貨幣を生成する行為は、具体的には、商品所有者が自らの商品に意志を宿し、価格をつけた時点で発生する。商品に価格をつける、という行為の裏には貨幣商品金で自らの商品の価値を表現する、という商品所有者たちの共同行為に参加する、という事態を含んでいる。この事態は意識されないから貨幣を生成するものは無意識のうちでの本能的共同行為だということになる。さらに貨幣は、商品所有者たちが、自らの商品に価格をつけ、市場に出す、という日々の行為によって、その都度生成されている。この行為が止めば、貨幣も消滅する。ただ無意識のうちでの本能的共同行為は単に止めようと意識したところで止められるものではない。商品・貨幣を廃止する、ということを経験するのではなく、商品・貨幣の人々に対する支配力を弱めていくことで新しい社会関係をつむぎ出していくこと、このことがいま問われている。

マルクスの貨幣論 (1)

価値の尺度

1) 文化知から見た価値尺度機能

『資本論』の貨幣論は、第三章貨幣または商品流通で述べられているが、その項目は第一節が価値尺度、第二節が流通手段で、これはさらに (a) 商品の姿態交換、(b) 貨幣の通流、(c) 鑄貨、価値章標、にわけられている。そして最後の第三節貨幣が (a) 貨幣蓄蔵、(b) 支払手段、(c) 世界貨幣、となっている。まず価値の尺度から見ていこう。

マルクスは金を貨幣商品として前提したうえで『資本論』現行版では次のように述べている。

「金の第一の機能は、商品世界にたいしその価値表現の材料を提供する点、あるいは諸商品価値を質的に同等で量的に比較されうる同名の大いさとして表示する点にある。かくして、金は価値の一般的な尺度として機能するのであって、独自の等価商品たる金がさしあたり貨幣となるのは、この機能によってに他ならない。

諸商品は、貨幣によって較量されうるものとなるのではない。その逆である。すべての商品は、価値としては対象化された人間的労働であり、したがって絶対的に較量されうるものであるがゆえに、すべての商品が、それらの価値を同じ独

自な商品で共同的に較量し、かくしてこの商品を、それらの商品の共同的な価値尺度または貨幣に転形することができるのである。価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的な価値尺度たる労働時間の必然的な現象形態である。」(原典 99 頁)

貨幣生成論を文化知の見地から見れば、それは物象による人格の意志支配であり、商品に自分の意志を宿した商品所有者たちが、自分たちの商品の価値を金で表現するという無意識のうちでの本能的共同行為の成立に他ならなかった。そして、この共同行為は、商品所有者たちが、商品に価格をつけるという行為のうちで無自覚的になされているのであった。

商品に価格をつけてもまだその商品は交換されてはいないが、しかし商品の価値が貨幣で表示されることで、この商品は交換過程に入り、そして交換過程にある商品金に貨幣という形態規定を与えた。だから貨幣の第一の機能は、諸商品が金に貨幣商品としての形態規定を与える価格づけで価値の尺度として役立つことなのである。価格づけで新たに生成された貨幣商品金は、まず商品の価値の尺度として機能したのである。この事情は初版では次のように述べられている。

「諸商品が金において自分たちの一般的な相対的な価値表現を自分たちに与える

ということによって、金は諸商品に対立して諸価値の尺度として機能する。」(初版原典 55 頁)

現行版から引用しておいた最初のパラグラフに相当する部分は、初版ではこのようになっている。双方を比較してすぐ気がつくことは、主語が初版では諸商品となっているのに、現行版では金にかえられていることである。しかし、貨幣金を主語にしたことで、現行版では価値尺度としての金の受動的 성격が把握しにくくなっている。諸商品を主語にしている初版を見れば、商品に価格をつけるという商品所有者の行為が、交換過程で金に価値尺度としての機能を与えるものであることが容易に見てとれる。

2) 価値尺度としての金の観念性

次にマルクスは、価値尺度としての貨幣が観念的な貨幣にあると主張している。現行版をみよう。

「商品の価格または貨幣形態は、その価値形態一般と同じように、その感覚的・実在的な物体形態から区別された、つまりただ観念的または表象的な形態である。鉄・亜麻布・小麦などの価値は眼には見えないけれども、これらの物そのもののうちに実存する。それは、それらの物と金との同等性、金に対する一つの連関—それはいわば、それらの物の頭の中でのみ幽霊のように現われる—によって表象される。だから商品の保護者は、その価格を外界に伝えるためには、彼の舌で商品の代弁をするか、商品に紙札

をぶら下げるか、しなければならない。金によっての商品価値の表示は観念的なものであるから、この処置のためにはやはりただ表象的または観念的な金充用されうる。商品の獲得者が誰でも知っているように、たとえ彼が自分の商品の価値に価格の形態または表象的な金形態を与えても、彼はまだそれを金化したのではなく、また幾百万という商品価値を金で評価するためにも、彼は現実の金の一片も要しない。だから、価値尺度という機能においては、貨幣は、ただ表象的または観念的な貨幣として役立つのである。」(原典 100 ~ 1 頁)

価値尺度としての金が観念的なものであることについて、マルクスは二つの意味を与えている。一つは金による商品価値の表示が観念的であることであり、もう一つは、貨幣金自体は存在しなくてもよい、ということである。従来後者の観念性については理解されてきたが前者の観念性については無視されてきた。というのも、これは科学知にとって手に負えないものだったからである。

前者の観念性について明らかにしていくために、初版の叙述をみてみよう。

「価格の確定されている商品は二重の形態をもっている。実在的な形態と想像的または観念的な形態とである。その商品の現実の姿は、使用対象の姿、具体的な有用労働の生産物の姿、たとえば鉄である。その価値姿態、すなわち、一定量の等質な人間的労働の物質化としてのその現象形態は、その価格であり、ある量の

金である。しかし、金は鉄とは違う物であって、鉄は、その価格においては、自分とは別な物であるとはいえ自分と価値の等しい物としての金に、自分自身を関係させるのである。商品の価格または貨幣形態は、ただこのような等置する関係のうちのみ、つまりいわばただこの商品の頭のなかにも、存在するのであって、商品の所有者は、商品の価格を外界にたいして表示するためには、自分の舌を商品の頭の中に突っ込むか、または商品に紙片をぶらさげるかしなければならないのである。それだから、商品の価値の形態は、商品の使用価値の手ごたえのある実在的な物体形態とは違う想像された観念的な貨幣形態なのである。このように諸商品はまたそれらの価値を、ただ観念的に表現するだけなのだから、諸商品はまたそれらの価値を、やはりただ想像的または観念的な貨幣において表現するのである。それゆえ、諸価値の尺度は、ただ、想像された観念的な貨幣としての貨幣なのである。」(原典 56-7 頁)

マルクスはここで価格形態にある商品が二重の形態をもっているとし、その実在的な形態とは別の想像的な観念的な形態について興味ある叙述を行っている。価値の現象形態が超感性的なものであり、そして、この眼に見えない現象形態が商品の現物形態に形態規定をする構造が、ここでは諸商品の金との等置の関係から明らかにされている。

諸商品の価格形態、つまりこれらの価値の一定分量での金での表示は、諸商品

がそれぞれとは異なる物である金を自分と価値の等しい物として形態規定している。この形態規定は目に見えない現象形態によるものだから、この等置の関係でのみ成立し、それはあたかも商品が頭で考えているようなものだ、とマルクスは言っている。

ここで諸商品が人間の思考と同じく抽象し、判断する機能をもった概念的存在であり、そして、商品所持者はこの頭に舌をつっこむこと、つまり商品の判断に自分の意志を宿すことで価格づけを行うものであることが述べられている。

以上から明らかのように、貨幣金の価値尺度機能とは、商品世界にたいしてその価値表現の材料を提供し、あるいは諸商品価値を質的に同等で量的に比較される同名の大いさとして表示する点にあるのであるが、根本的な問題は、この価値尺度機能は諸商品の価値表現の帰結であるということである。そしてその機能は商品所持者が商品の頭に自分の舌を突っこんで価格を外界に表示することでなしとげられる。だから、無意識のうちでの本能的共同行為で貨幣を生成させることと貨幣金に価値の尺度という機能を与えることは同時に行われていることにある。金の価値尺度機能とは、こうして物象に意志支配された人格が無意識のうちで実現した価値の超感性的な現象形態において機能している。ここから価値尺度としての金の観念性の第一の規定が生じている。